

Title	江戸語のノ有り疑問文：多様な形式の使用実態
Sub Title	
Author	林, 淳子(Hayashi, Junko)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2023
Jtitle	日本語と日本語教育 No.51 (2023. 3) ,p.1- 19
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20230300-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

江戸語のノ有り疑問文

—多様な形式の使用実態—

林 淳 子

1. 目的

日本語の現代共通語において、疑問文の文型は多様である。たとえば、丁寧体の疑問文に限っても、表1のように終助詞「カ」、準体助詞「ノ」、助動詞「ダロウ」、動詞シヨウ形が単独で、あるいはそれらの形式を連携させて、さまざまな文末形式を構成する。

表1の文型のうち、「～カ／～ノデスカ」「～デシヨウ／～ノデシヨウ」「～デシヨウカ／～ノデシヨウカ」はそれぞれ「ノ」の有無において対立している。このような疑問文における「ノ」の有無の区別は、疑問文が実現する質問表現の意味特性の違いに対応するものとして長く研究されてきた（田野村（1990）、野田（1997）、林（2020）など）。たとえば、田野村（1990）では下記の（1）～（5）の例を挙げ、「ノカ」疑問文（引用者注：「ノ」を構成要素に含む疑問文の総称）に見られる複数の意味特性を下記のように指摘している（各例の括弧内に田野村（1990）のページ番号を記す）。

- 背後の事情や実情をたずねる既定性

（1） a. わたし、お先に失礼します。——何か用事でもあるんですか？

b. (人ばかりを見て) 何があったんですか？ (p.54, 55)

- 披瀝性の含み（相手にたずねなくては答えの知りようがないような事柄をたずねているという印象）

表1 現代日本語の丁寧体疑問文の文型

文末形式	種類	例
～φ	Y/N	雨降っていますか？
	Wh	彼はどこに行きましたか？
～カ	Y/N	雨降っていますか？
～ノデス	Wh	彼はどこに行ったんですか？
～ノデスカ	Y/N	雨降ってるんですか？
	Wh	彼はどこに行ったんですか？
～デショウ	Wh	彼はどこに行ったでしょう？
～ノデショウ	Wh	彼はどこに行ったんでしょう？
～デショウカ	Y/N	雨降ってるのでしょうか？
	Wh	彼はどこに行ったのでしょうか？
～ノデショウカ	Y/N	雨降ってるのでしょうか？
	Wh	彼はどこに行ったのでしょうか？
～シマショウカ	Y/N	そろそろ行きましょうか？
	Wh	どこに行きましょうか？

(2) a. お生まれは {どちらですか／どちらなんですか} ？

b. きょうは {何曜日ですか／？ 何曜日なんですか} ？ (p.61)

- 特立性の含み（他の可能性ではなくそれであるかとたずねているという印象）

(3) これは（人ニモラッタノデハナクテ）自分で買ったんですか？

(p.64)

- 感情的な含み

(4) a. 本当におまえにできるのか？（疑念）

b. こんなものを食べてるの？（驚嘆）

c. これを全部わたしに下さるんですか？（感激） (p.66)

• 話し手の予想

(5) (元気がない人に対して) 気分でも悪いの？ (p.67)

このように、現代共通語では、疑問文の文型の多様性を支える一つの要素である「ノ」によって、質問という言語行為が纏う話し手の物腰や微妙なニュアンスが表されると考えられている。しかし、このような表現は、「ノ」の有無がなかった時代の日本語、たとえば疑問文は基本的に連体形で終止するという統一した文末形式をとっていた古代語では見られないものであろう。そもそも準体助詞「ノ」が「ダ」などの断定辞を伴って述部に現れ、いわゆるノダ文が発達し始めるのは近世初期であるという（土屋（2009））。したがって、疑問文に「ノ」が参画し、疑問文型の中に「ノ」の有無の区別が生じるのも同時期以降であると考えられる。

出現・発達期である近世のノダ文については、現代共通語のノダ文との対照を通して、その特徴を探る研究が近年盛んに行われている。たとえば、佐藤（2011）ではノダ文の推量文（「ノダロウ」）について、幸松（2020）では「事情説明」以外の用法の平叙ノダ文について、近世期の様相が形式・用法の両面で明らかにされている。しかしながら、「ノ」が参画する疑問文については、鶴橋（2018）や幸松（2020）が形式面で平叙文と同じ文末「ノダ」を有する疑問詞疑問文（「ナゼ～ノダ」など）に言及する一方で、疑問文の「ノカ」は考察の対象外とするなど、疑問文全体にわたって「ノ」の使用実態把握を目指す研究は管見の限り見当たらない。

そこで本稿では、ノダ文の出現・発達期である近世の疑問文全体を対象に「ノ」の参画のあり方を確認することを目的とする。この時期の例は、「ノ」が疑問文型に参画する際の形式面のあり方でも、「ノ」が参画する疑問文の表現性の点でも、現代共通語と様相を異にする可能性がある。したがって、最終的には、形式と表現性の交渉を明らかにすることが目的であ

るものの、青木（2016）が近世においては「だ／のだ」の間で形態と意味が対応せず複雑な様相を呈していると指摘するように、新しい文法形式の発達過程においては形式と意味の対応が必ずしも安定的でないことが予想される。そのため、一旦形式とその実現する意味とを分け、本稿ではもっぱら形式面で整理を行うこととする。

なお、以下では、準体助詞「ノ」が構成要素として参画する疑問文を「ノ有り疑問文」、「ノ」が参画しない疑問文を「ノ無し疑問文」と呼ぶ。

2. 方法

近世から近代にかけて江戸および東京で用いられた質問表現の形式を網羅的に整理した田中（1956）によれば、「ノ」が「カ」の前に現れる形、すなわち「ノカ」の形が質問表現として用いられる例は、信頼できる江戸語の口語資料が現れる宝暦期（18世紀中頃）以降、安定して確認できるという。そこで、本稿では準体助詞「ノ」が疑問文に参画した初期の実態把握という目的のため、近世江戸語を調査の対象とする。

これまでの研究において、ノ有り疑問文への言及は、田中（1956）の「ノカ」や後述する金水（2011）の「ナゼ…ノダ」のように、特定の文型の使用状況を述べるものであった。これに対して、本稿はあり得るノ有り疑問文の文型を網羅的に挙げることを目指す。そのため、まずはノ有り疑問文の用例を幅広く採集するべく、『日本語歴史コーパス江戸時代編Ⅰ洒落本』『同Ⅱ人情本』のコアデータを対象に、準体助詞「ノ」が文末あたりに出現する例を集め、その中から疑問文と認定できる例を抽出するという方法をとる。検索条件および、検索対象の詳細は下記のとおりである。

【検索条件】 語彙素：の

品詞：準体助詞

出現位置：文末から8語以内

【検索対象】

- ①江戸時代編＞洒落本＞コア＞江戸＞本文種別：会話
- ②江戸時代編＞人情本＞コア＞本文種別：会話

検索対象として洒落本と人情本を選んだのは、疑問文による質問が対話の中に頻繁に現れ、かつ現代語との比較の際に同様の状況を設定することが比較的容易であるためである。また、準体助詞「ノ」の出現位置を文末から8語以内としたのは、「ノデゴザイマスカ」のように準体助詞「ノ」から最文末までに複数の語が存在する例が採集から漏れないようにするためである。

このような検索により得られた用例を確認し、前後文脈等から疑問文と認定できるものを抽出した。ただし、「ノジャナイカ」「ノデゴザイマセンカ」のような否定疑問文は否定疑問文特有の問題が絡むため、以下では扱わない。以下、例を挙げる際には、読みやすいように表記を改めたものがある。

3. ノ有り疑問文の文型

3-1 疑問文の種類

文の種類としての疑問文を決定づける、その本質的な特徴は、話しことばにおいて相手に答えを求め、相手から言語的反応を引き出す表現であるということである。すなわち、疑問文は内容面で話し手の抱える不確定感覚を表し、それゆえにその不確定感覚を見せられた相手を何か言語的反応をしなければならないという気持ちにさせるのである（詳細は林（2020）で述べたことがある）。疑問文が求める言語的反応の内実は、したがって、疑問文が表す不確定感覚の違いに応じて大きく二種に分けられる。たとえば、(6)のように文中に不明項目（「何」）を有する疑問文は、事態の一部が分からないという話し手の不確定感覚を表し、それゆえに不明項を特定

するような答え（「ラーメン」など）を相手に求める。一方、(7)のように文中に不明項目のない疑問文は、事態がそのとおり成立するかどうか分からないという話し手の不確定感覚を表し、それゆえに Yes か No の判定を答えとして求める。

(6) 「昼ご飯は何を食べましたか？」

(7) 「もう昼ご飯を食べましたか？」

以下では、Yes/No の判定を答えとして求める疑問文を判定要求疑問文、「何」「誰」「いつ」「どこ」などの不明項を特定する答えを求める疑問文を不明項特定要求疑問文と呼び、疑問文の種類によって用いられるノ有り疑問文の文型が異なることを述べる。

3-2 洒落本

用例採集範囲の洒落本に見られるノ有り疑問文の用例数は多くないが、表2で示すように、判定要求疑問文では「ノカ」、不明項特定要求疑問文では「ノダ」が用いられるという明確な文型の使い分けが確認できる。そして、それぞれに後ろに終助詞を付けた形も存在する。

表2 洒落本のノ有り疑問文

	判定要求	特定要求	合計
ノカ	12	0	12
ノカへ/ノカエ	7/0	0	7
ノカノ	1	0	1
ノダ	0	2	2
ノダへ/ノダエ	0	3/1	4
合計	20	6	26

たとえば、文末「ノカ」の(8)は相手が何度も廊下へ出ることの背景の事情として「客が来たから待たせておく」という事態を想定し、その正否をたずねる判定要求疑問文である。一方、文末「ノダ」の(9)は行く先がどこであるかをたずねる不明項特定要求疑問文である。

(8) 【梶原源太】さつきからたび／＼廊下へ出るのがなんだな客がきたから
こつちのあくのをまたせてをくのか。

(仕懸文庫)

(9) 【梶原源太】こうどけへいくのだ。

【てう】ちよつと手水にいつてめへりやす。

(仕懸文庫)

3-3 人情本

人情本においても、表3に示すように、この「ノカ」と「ノダ」の使い分けの傾向は変わらない。しかし、洒落本の用例と比較すると、相違点として以下の2点が挙げられる。一点目は、後ろに付く終助詞の種類が増え、洒落本にも見られた「へ」「エ」だけでなく「ネ」「ナ」などが加わることである。もう一点は洒落本では確認されなかった丁寧体の文型(「ノデスカ」「ノデゴザリマスカへ」「ノデアリマスエ」「ノデゴザイマスエ」)が加わることである。これら2点の変化は「ノカ」系統(判定要求疑問文)にも「ノダ」系統(不明項特定要求疑問文)にも共通して観察される。

新たに加わった丁寧体ノ有り疑問文の用例は(10)～(13)の4例である。「ノカ」の丁寧体である(10)と(11)は判定要求疑問文であり、「ノダ」の丁寧体である(12)(13)は不明項特定要求疑問文であることから、丁寧体でも普通体と同様に、「ノカ」と「ノダ」の使い分けが成立していたことが分かる。

(10) 【こう】「沢山御いじめ被成。小照さんに情合だなんぞと。言はれ

表3 人情本のノ有り疑問文

	判定要求	特定要求	合計
ノカ	20	2	22
ノカへ／ノカエ	16／2	1／0	19
ノカネ	1	0	1
ノカネへ	1	0	1
ノデスカ	1	0	1
ノデゴザリマスカへ	1	0	1
ノダ	0	28	28
ノダへ／ノダエ	0／0	14／2	16
ノダナ	0	2	2
ノダノ	0	1	1
ノダヨ	0	1	1
ノデアリマスエ	0	1	1
ノデゴザイマスエ	0	1	1
合計	42	53	95

たもんだから意趣がへしに吾儕を。おいじめ被成ンです
か。」

(おくみ惣次郎春色江戸紫 初編上)

- (11) 【金】「どうだお亀ちつとは気色が直つたか。」

【おかめ】「ハイなんだかどうもふさぎつゞけで。やつぱり頭痛が
いたします。アノあなたはどうでもあしたの朝お立あ
ぞはすのでござりますかへ。」

(小三金五郎仮名文章娘節用 前編上)

- (12) 【長】「どふしたんでございますエ。」

【此】「私きをばまるでこけにして居るんでざんさアな。」

(春色梅兎与美 初編卷二)

(13) 【米】「エモシそして養子に行しつた御宅はマアどふした訳で急に
身代がたゝなくなつたのでありますエ。」

【主】「さればサ今さら考へ見りやアやつぱり鬼兵へが先の番頭の
松兵へとなれ合て直に戸を塞す身上を承知でおれを急養子
そんな〔こと〕は露しらず…」

(春色梅兎与美 初編卷一)

3-4 疑問文の種類と文型の対応

3-2、3-3 で確認した判定要求疑問文は「ノカ」、不明項特定要求疑問文は「ノダ」という使い分けがこのようになる事情は、3-1 で述べたように疑問文の種類が内容として表される話し手の不確定感覚に基づく分類であることから説明可能である。すなわち、不明項（「何」「誰」「いつ」「どこ」など）を文中に含む不明項特定要求疑問文は不明項があることをもって話し手の不確定感覚を示すことができるため、文末が「(ノ)ダ」と断定の形をとっても問題なく疑問文として成立する。これに対して、言語化した事態内容そのもの（例「もう昼ご飯を食べたのか？」の「もう昼ご飯を食べた」の部分）に不確定感覚を表す要素を含まない判定要求疑問文では、文末に「カ」を置くことによって不確定感覚を表すことが必要なのである。

この使い分けは現代共通語にも通じるものであり、現代共通語でも (14) (15a) のように判定要求疑問文は「ノカ」文型、不明項特定要求疑問文は「ノダ」文型を用いる。(15b) のような文末「ノカ」の不明項特定要求疑問文は、話しことばで質問に用いる文型としては使われないであろう。

(14) 「もう昼ご飯を食べたのか？」

(15) a. 「昼ご飯は何を食べたんだ？」

b.# 「昼ご飯は何を食べたのか？」

ただし、現代共通語では、丁寧体の「ノカ」疑問文が判定要求疑問文（(16)）だけでなく、不明項特定要求疑問文（(17)）にも用いられる。

(16) 「もう昼ご飯を食べたんですか?」

(17) 「昼ご飯は何を食べたんですか?」

この点で江戸語と現代共通語は異なる。すなわち、人情本では丁寧体であっても「ノカ」文型と「ノダ」文型の使い分けが維持されるのに対して、現代共通語では丁寧体では「ノカ」と「ノダ」の使い分けが解消され、「ノデスカ」が疑問文の種類を問わず用いられるのである。確かに、不明項特定要求疑問文は不明項の存在ゆえに文末に「カ」がなくても成立し得るが、「カ」の存在が疑問文の成立を妨げるわけではない。つまり、不明項特定要求疑問文にとって「カ」は「なくてもいい」理由があるが、「あってはいけない」というわけではないのである。したがって、「ノデスカ」が明治期以降に使用領域を広げ、不明項特定要求疑問文にも用いられるようになったとしても不思議はないであろう。

なお、人情本の用例採集範囲では丁寧体のノ有り疑問文は上記（10）～（13）の4例しか見られなかった。これは、同じ範囲でもノ無し疑問文であれば（18）～（20）のような丁寧体の疑問文が多く見られるのに比して極端に少なく、人情本の段階では丁寧体のノ有り疑問文が未発達な状態にあった可能性が示唆される。

(18) 【くみ】「モシ慈母様お薬を只今召吞ますか。最う些後に遊ばしますか。」

（おくみ惣次郎春色江戸紫 初編上）

(19) 【惣次郎】「…お薬も精出して召吞疾御全快遊ばせ。なんなら最一服自己が煎じませうか。」

(おくみ惣次郎春色江戸紫 初編上)

(20) 【お菊】「ヲヤ房さん其字は何とよみますエ。」

(春色連理の梅 初編上)

4. ノ有り疑問文の話者

4-1 疑問文の文型と話者の属性

現代共通語では、判定要求疑問文の「ノカ」も、不明項特定要求疑問文の「ノダ」も話者のキャラクタが男性に限定される文型である。たとえば、(21) のような文末「ノカ」の判定要求疑問文は男性話者のごつくばらんな話し方、(22) のような文末「ノダ」の不明項特定要求疑問文は男性話者の目下の人に対する話し方として一般に認識されている。

(21) 「今から行くのか？」

(22) 「どこへ行くんだ？」

このような話者の属性と特定の文型との結びつきは、ノ有り疑問文の出現当初から見られるものであるのか、以下で確認する。

4-2 後接助詞の有無

本稿の範囲で採集した洒落本・人情本のノ有り疑問文を対象に、各文型の話者の性別を示せば、表4のようになる。

そもそも用例採集範囲において男性と女性の発話が同数ずつ存在するわけではないため、判断が難しいものの、大まかな傾向として「ノカ」も「ノダ」も後ろに何も助詞がつかない文型は話者が男性に偏り、後ろに終助詞「エ／へ」がつく文型は話者が女性に偏ることが表4から読み取れる。例を挙げれば、(23)の男性話者【丹】の発話の中には、判定要求疑問文「～ノカ」と不明項特定要求疑問文「～ノダ」の例が見られるが、いずれも後ろに助詞は付いていない。これに対して、女性話者の例である(24)(25)

表4 話者の性別と文末形式（洒落本・人情本）

	男性		女性	
	洒落本	人情本	洒落本	人情本
ノカ	12	16	0	6
ノカエ	0	0	0	2
ノカヘ	1	3	6	14
ノカネ	0	0	0	1
ノカノ	1	0	0	0
ノカネヘ	0	1	0	0
ノダ	2	26	0	2
ノダエ	1	0	0	2
ノダヘ	2	3	1	11
ノダナ	0	0	0	2
ノダノ	0	0	0	1
ノダヨ	0	1	0	0
ノデスカ	0	0	0	1
ノデゴザリマスカヘ	0	0	0	1
ノデゴザイマス	0	0	0	1
ノデゴザリマス	0	0	0	1
合計	19	50	7	45

は「ノカ」「ノダ」の後ろに助詞が付いている。

- (23) 【丹】「そして今じやア何所にゐるのだ。つばくら口の懐紙を持って
歩行からは。近所にゐるか。何所へ稽古にゆく。」
- 【長】「イ、エ此近所じやアありませんヨ。小梅に居ますは。」
- 【丹】「小梅から此所へ稽古に来るのか。」

(春色梅兎与美 初編卷三)

(24) 【丹】「よくいろ／＼なことをいふヨ。

そんならどふでも勝手にしろ。」

【米八】「をやおまはんは腹をたたしつたのかへ。」

【丹】「腹をたつてもたゝねへでも。打捨ておくがいゝ。」

(春色梅兎与美 初編卷一)

(25) 【仇吉】「丹さん。」

【丹】「なんだ。」

【仇吉】「なぜまあそんなにふさいでるのだへ」と側へすはり摺

寄て丹次郎が手をとらへ…

(春色辰巳園 初編卷二)

この傾向から外れる例として、女性話者が後続助詞のない「ノカφ」「ノダφ」文型の疑問文を発話する例には次のようなものがある。「ノカφ」の使用例である(26)は使用人に対する質問場面、「ノダφ」の使用例である(27)は母が子に対して叱責する場面であり、どちらもある程度粗雑な言い方をすることが許される場面であると言えよう。言い換えれば、そういった場面状況に支えられなければ、女性が「ノカφ」「ノダφ」文型の疑問文を発話することは難しかったと推測される。

(26) 【蝶五郎】「…しかし文でもやりてへが此通り眼が。」

【てる】「ナニお眼でもわるいのか。」

【蝶五郎】「エ。イエなアにちつと斗りのほせ眼でござりやせう。」

(裏里時次郎明烏後の正夢 初編下)

(27) (子が投げた茶碗が障子に当たって)

【母】「コレそのなげうちはだれにするのだ。サアおれをなげるともぶつともしろ。日ましふざけて親をバカにしやアがる。」

これに対して、「ノカ/ノダ」の後ろに「へ」がつく文型の発話例である(24)(25)を見ると、特に粗雑な言い方をするのではない通常のやりとりの場面である。

黄(2017)によれば、江戸語の終助詞「エ」(引用者注:「へ」も含む)は「自分がおかれている状況に対して疑問が生じて質問する時」、「相手に命令したり、禁止したりする時」、「相手に呼びかける時」に用いられるという。また、『春色梅児誉美』に見られる問いかけ表現の形式と疑い表現の形式を比較した小野(1998)によると、終助詞「ネ」「ナ」は問いかけにも疑いにも共通して見られるのに対して、終助詞「エ」「ノ」は問いかけにのみ見られるという。さらに、前述の黄(2017)は終助詞「エ」の話者の性別について、調査範囲に見られる終助詞「エ」の例のうち85.6%を女性の使用例が占めると述べている。このような先行研究の知見から、「ノ」の有無にかかわらず、終助詞「エ」を文末に置く質問表現は当時の女性話者の質問の形式として一般的であったと見られ、準体助詞「ノ」を含む文型「ノカエ」「ノダエ」もその一画にあったと考えられる。

4-3 丁寧体ノ有り疑問文の話者

4-2で確認したように、普通体のノ有り疑問文においては後ろに助詞がつくか否かと話者の性別が大まかな対応を見せる。次に、人情本の用例採集範囲に4例のみ見られた丁寧体のノ有り疑問文に目を向ければ、いずれも女性話者の発話例である。4例のうち、(28)は相手の行動の背景にある心情を想像し、そのとおりに尋ねる場面、(29)～(31)は相手の体調や置かれた状況を心配して質問をする場面である。

(28)【こう】「沢山御いじめ被成。小照さんに情合なんぞと。言はれたもんだから意趣がへしに吾儕を。おいじめ被成ンです

か。」

(おくみ惣次郎春色江戸紫 初編上)

(29) 【金】「どうだお亀ちつとは気色が直つたか。」

【おかめ】「ハイなんだかどうもふさぎつゞけで。やつぱり頭痛が
いたします。アノあなたはどうしてもあしたの朝お立あ
ぞはすのでござりますかへ。」

(小三金五郎仮名文章娘節用 前編上)

(30) 【長】「どふしたんでございますエ。」

【此】「私きをばまるでこけにして居るんでざんさアな。」

(春色梅兎与美 初編卷二)

(31) 【米】「エモシそして養子に行しつた御宅はマアどふした訳で急に
身代がたゝなくなつたのでありますエ。」

【主】「さればサ今さら考へ見りやアやつぱり鬼兵へが先の番頭の
松兵へとなれ合て直に戸を塞す身上を承知でおれを急養子
そんな〔こと〕は露しらず…」

(春色梅兎与美 初編卷一)

江戸語の断定表現の使用実態を詳述する長崎(2012)によれば、人情本において「デス」は女性使用例が男性使用例より圧倒的に多く、丁寧さだけでなく、話し手が自身の「身を低める」ような語感を含むという。また、「デゴザリマス」「デゴザイマス」は性別・階層にかかわらず改まった場面で使用される標準的な言葉遣いであり、「デアリマス」も本来は教養層が用いる「よいことば」であるものの、遊里ことばでは後ろに終助詞をつけることによって情意を表現する私的な言葉遣いになるという。(28)～(31)のように女性話者が相手を心配したり、相手の心情を想像したりする場面での発話として丁寧体のノ有り疑問文が用いられる事実は上記のような断定表現に関する知見にも沿うものである。

4-4 話者の性別と文型の対応

以上より、江戸語のノ有り疑問文について、男性話者は普通体の「ノカφ」「ノダφ」を用い、女性話者は普通体の「ノカ」「ノダ」の後ろに助詞がつく文型か、あるいは丁寧体のノ有り疑問文を用いるというように、文型と話者の性別との対応をまとめることができる。

なお、中野（1993）によれば、江戸語には（32）のように「ノ」で終わる疑問文の例が少数ながら見られ、いずれも女性の使用例であるという。

（32）夫じやアお前どうする積りなノ（春色恋廻染分解 五編中巻6オ4）
（中野（1993）p.46）

ここまで見てきたことを総合すると、江戸語におけるノ有り疑問文の文型の多様化には、話者の性別に関連して次のような流れがあったことが推測される。すなわち、「ノカφ」「ノダφ」は男性話者の話し方に適した文型であったため、女性話者がノ有り疑問文を発話する場合には、当時の疑問文一般の傾向に倣い、後ろに「エ」などの助詞を付加するという方法が洒落本の頃から存在した。加えて、文を丁寧体にするることによってこの問題を解消する方法も人情本の頃には見られるようになった。と同時に、普通体の「ノカ」「ノダ」から「カ」「ダ」を取り、「ノ」単独で用いる方法も同時期から見られるようになった。つまり、男性話者の文型である「ノカφ」「ノダφ」に何か他の要素を加えたり、反対に要素を削ぎ落とししたりしたものは、まずは女性話者の文型として使用されたのである。

ノ有り疑問文の文型の多様化にはもちろん話者の性別以外のさまざまな要因が絡むと思われるものの、要因の一つとして上記のようなことが考えられはしないだろうか。そして、その後、現在に至るまでの間に、文型の多様性が維持されたまま、「ノデスカ」や「ノ」が話者の性別を問わず使用される文型となっていったと考えるのも、不自然なことではないであ

ろう。

この仮説の検証は今後の課題とするが、話者の性別という観点から文型を整理すると上記のようなノ有り疑問文発達の流れが見えてくることを指摘しておきたい。

5. まとめ

本稿では、江戸語の口語におけるノ有り疑問文の使用実態を形式的側面から把握することを目的として、洒落本と人情本を対象に用例の採集と分析を行った。対象とした範囲において採集されたノ有り疑問文の用例は決して多くないが、限られた数の用例からでも、下記のような明確な傾向を読み取ることができた。

- ①疑問文の種類による文型の使い分けが見られる。すなわち、判定要求疑問文には「ノカ」系統の文型が用いられ、不明項特定要求疑問文には「ノダ」系統の文型が用いられる。
- ②話者の性別による文型の使い分けが見られる。普通体の場合、後ろに何も助詞のつかない「ノカ ϕ 」「ノダ ϕ 」の話者は男性に偏るのに対して、後ろに「へ／エ」の助詞がつく文型の話者は女性に偏る。
- ③ノ無し疑問文と比べ、ノ有り疑問文は丁寧体が未発達な状態である。数例見られる丁寧体のノ有り疑問文はすべて女性話者の発話例である。

このようなノ有り疑問文の使用実態は、特に疑問文の種類との対応について、大きな枠組みとして見れば、現代共通語にも引き継がれているものの、「ノデスカ」文型の使用領域拡大など明治期以降現在に至るまでに変化が生じたと想定される部分もある。

また、形式としてのノ有り疑問文は田中（1956）が早くに指摘したように江戸語口語資料において初期から確認されるものの、金水（2011）で

「なぜ」の疑問文におけるノダ文の比率が江戸時代を通して増加することが示されているように、疑問文全体におけるノ有り疑問文の存在感が増し、ノ有り疑問文とノ無し疑問文がそれぞれに担う機能領域を分化させていくといった機能面での変化は、形式としてのノ有り疑問文成立以降に生じたものと思われる。

本稿ではもっぱら形式の面から出現・発達期のノ有り疑問文を扱ったが、機能面で想定されるこれらの変化の過程を明らかにすることを次の課題としたい。

参考文献

- 青木博史 (2016) 『日本語歴史統語論序説』 ひつじ書房
- 小野葉子 (1998) 「『春色梅児誉美』の疑問表現—「問いかけ」と「疑い」の形式の交渉—」『青山語文』 28
- 金水敏 (2011) 「第3章 統語論」(金水敏・高山善行・衣畑智秀・岡崎友子 (2011) 『シリーズ日本語史3 文法史』 岩波書店)
- 黄孝善 (2017) 「近世後期江戸語終助詞「エ」の意味」『国語学研究』 56
- 小松寿雄 (1985) 『江戸時代の国語 江戸語—その形成と階層—』 東京堂出版
- 佐藤順彦 (2011) 「後期上方語におけるノデアロウの発達」『日本語文法』 11-1
- 田中章夫 (1956) 「近代東京語質問表現における終止形式の考察—その通時的展開について—」『国語学』 25
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I—「のだ」の意味と用法—』 和泉書院
- 土屋信一 (2009) 『江戸・東京語研究—共通語への道』 勉誠出版
- 鶴橋俊宏 (2018) 「滑稽本におけるノダとその周辺」『國學院雑誌』 119-11
- 長崎靖子 (2012) 『断定表現の通時的研究—江戸語から東京語へ—』 武蔵野書院
- 中野伸彦 (1993) 「終助詞の男女差の形成—江戸語における男女差形成の動き—」『山口大学教育学部研究論叢 第一部人文科学・社会科学』 43
- 野田春美 (1997) 「『の(だ)』の機能」くろしお出版
- 林淳子 (2020) 『現代日本語疑問文の研究』くろしお出版
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探究』くろしお出版
- 幸松英恵 (2020) 「事情を表さないノダはどこから来たのか—近世後期資料に見るノダ系表現の様相—」『東京外国語大学国際日本学研究 プレ創刊号』
- 湯澤幸吉郎 (1954) 『江戸言葉の研究』 明治書院

使用コーパス

国立国語研究所 (2019) 『日本語歴史コーパス 江戸時代編 I 洒落本』 <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#share> (2022年8月7日確認)

国立国語研究所 (2019) 『日本語歴史コーパス 江戸時代編Ⅱ 人情本』 <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#ninjo> (2022年8月7日確認)